愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第9号
2008.3
31-42.p.

古墳時代の鉄鐸について

早野浩二

本文では、最初に、春日井市高蔵寺５号墳の鉄鐸と砥石（提砥）、同廻間７号墳の鞴羽口、田原市藤原１号墳の鉄鐸と同２号墳の鉄塊を提示した。次に、鉄鐸にについての基礎的把握として、日本列島の鉄鐸の出土事例を検索し、研究の流れを参照した。それを踏まえて、高蔵寺５号墳、藤原古墳群周辺の情況を、美作地域において鉄鐸、鍛冶具、鉄滓、鉄塊が副葬、供献される現象と対比した。結果、祭祀具として鉄鐸が副葬、所持される背景に、鉄器製作との一定の相関を認めた一方、その関係性には地域性が反映されている可能性が高いことを述べた。

はじめに

本文は、古墳時代の祭祀にかかる研究の一環として、同時代の鉄鐸を対象とした基礎的な整理を試みるものである。最初に、春日井市高蔵寺５号墳の鉄鐸、同廻間７号墳の鍛冶具としての鞴羽口、田原市藤原古墳群の鉄鐸、鉄塊について資料を提示する。それを受けて、祭祀具としての鉄鐸の出土傾向と研究の流れを通覧し、鉄鐸に関連する諸事象を大局的に把握する。

さて、鉄鐸については、石突（状の鉄製品）として扱われることも多い。ここでは、扇形、あるいは台形に裁断した鉄板を丸めるように両端を閉じ合わせて鐸身とし、身の頂部に舌を吊るすための懸通孔が貫通する構造の製品を鉄鐸として認識する。なお、鉄鐸の部位名称は図１に示す通りである。舌については、幾つかの例から、頂部の懸通孔を通じて、先端を丸めた棒状体を針金状のもので吊るしていたことが指摘されているが、ごく単純な装置であることから、舌そのものは遺存しないことも多い。従って、鉄鐸を認識する際、舌の有無は第一義的な判断材料とはならない。

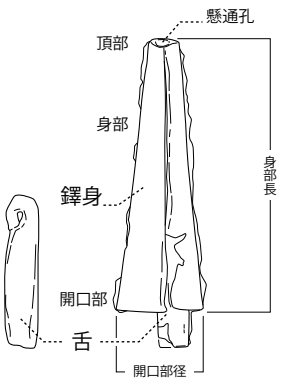


図１　鉄鐸の部位名称

資料

高蔵寺５号墳の鉄鐸

高蔵寺５号墳は、春日井市玉野町塚本に所在する（図２）。５基を数える高蔵寺古墳群は、庄内川に面した河岸段丘上に立地し、５号墳の西北西約 4.5km には、古式の双龍環頭大刀（双龍Ⅲ式）を副葬する同市の猪ノ洞古墳がある。また、対岸の河岸段丘上の名古屋市守山区上志段味地区・東谷山周辺には、白鳥塚古墳、志段味大塚古墳、東谷山古墳群などの古墳、古墳群が数多く分布する。５号墳の墳丘は、大部分が開墾によって失われ、すでに横穴式石室も露出していた。横穴式石室は西南方向に開口する全長 8.05 mの擬似両袖型石室である（図３）。玄

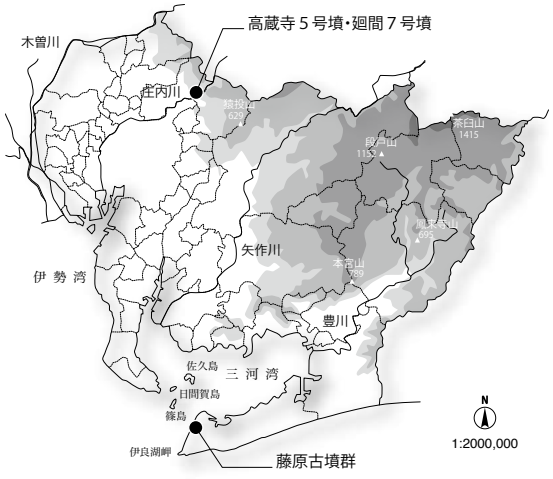


図２　古墳の位置

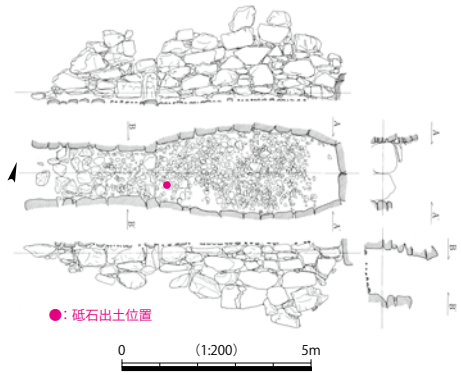


図３　高蔵寺５号墳横穴式石室

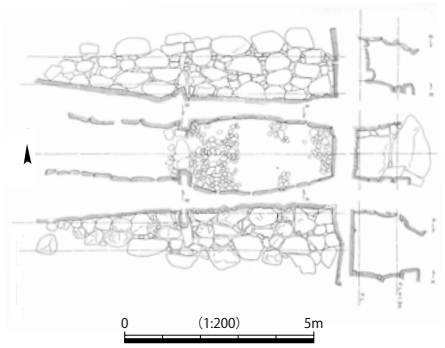


図５　廻間７号墳横穴式石室

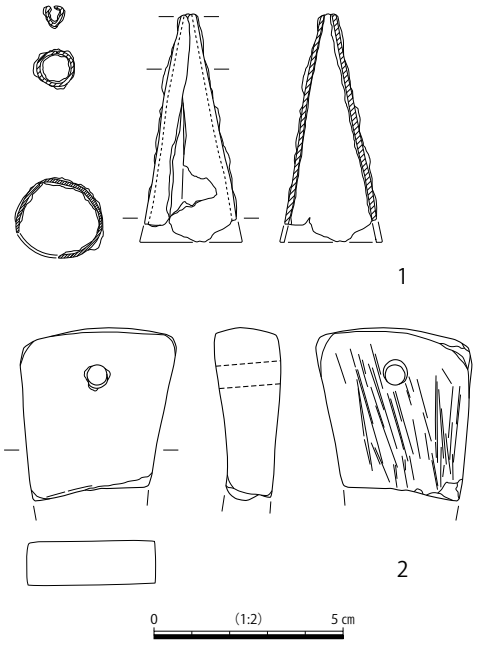


図４　高蔵寺５号墳出土鉄鐸・砥石

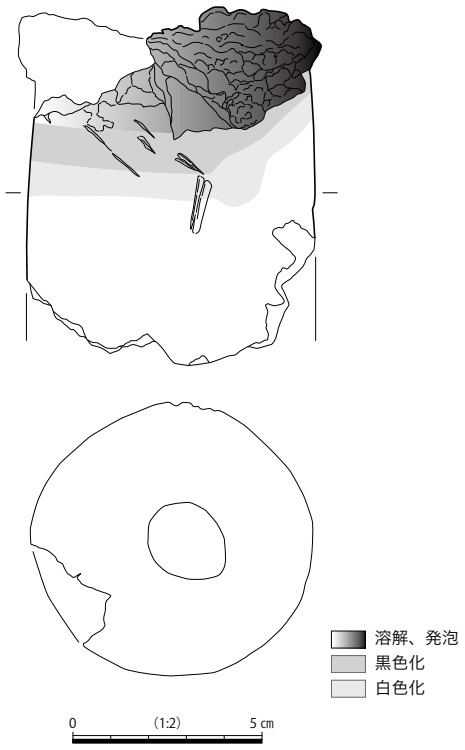


図６　廻間７号墳出土轡羽口

室は胴張りを呈し、長さ 4.72 m、最大幅 2.2 mを計測する。玄門には立柱石と梱石が配される。羨道は長さ 3.3 m、最大幅 1.4 mを計測し、開口部に向かってやや開く。

横穴式石室の玄室と玄門付近の床面からは、須恵器、耳環、大刀、刀子、鉄鏃、馬具、鉄鐸、砥石が出土した。「円錐形鉄製品」として報告された鉄鐸は、床面から出土した遺物としては報告されていない。砥石は、玄室内、（奥壁から向かって）左壁側の玄門近くの床面より出土した。なお、石室から出土した須恵器は、およそ東山 44 号窯期（TK209 型式期に併行）に相当する。

鉄鐸（図４－１）は、笠形にも近い円錐形で、身部長 6.0cm、開口部径 2.4cm を計測する。厚さ約 1.0mm の扇形の鉄板を閉じ合わせて製作され、合わせ目も明瞭に観察される。身の合わせ目下半には隙間があり、合わせ目は完全には閉じられていない。身の断面形は、開口部付近は正円に近いが、頂部付近は三角形に近い。頂部は懸通孔が貫通するが、舌は遺存しない。

砥石（図４－２）は、残存長 4.6cm、最大幅 4.1cm、最大厚さ 1.8cm の偏平な方柱状で、４面の側面を使用面とする。頂部に径 0.5cm の紐孔を穿孔した、いわゆる「提砥」で、石材は砂質凝灰岩である。

廻間７号墳の鞴羽口

廻間７号墳は、春日井市廻間町高森に所在し、内津川の支流、大谷川によって開析された小谷の丘陵斜面に立地する（図２）。なお、先の高蔵寺５号墳からは、独立丘陵である高座山を隔てた北北東 4.5km の位置にある。墳丘は、土砂の流出、林道開設によって大きく損壊するが、径約 11 m以上の円墳であったと推測されている。埋葬施設である横穴式石室は、西方向に開口する全長 7.8 mの擬似両袖型石室である（図５）。玄室は胴張りを呈し、長さ 3.8 m、最大幅 2.0 mを計測する。玄門には立柱石と梱石が配される。羨道は、長さ 3.5 m、幅 1.3 mを計測し、両側壁は直線的である。

玄室内の流入土中、玄室の床面付近からは、須恵器、土師器、耳環、刀子、鞴羽口が出土した。「円筒状土製品」として報告された鞴羽口は、玄室内の流入土から出土した。なお、石室から出土した須恵器はおよそ東山 44 号窯期（TK209 型式期に併行）に相当する。

鞴羽口（図６）は、肉厚、円筒状の形態で、残存長 9.6cm、外径 7.6cm、内径 2.4cm を計測する。先端部分は黒色ガラス質化し、先端部側から黒色（幅約 1 cm）、白色（幅 1 約 cm）に熱変化する。熱変化していない部分（被熱前）の色調は橙色～黄橙色である。精良な胎土で、胎土中には多くのスサが混和されていた痕跡も観察される。なお、鞴羽口については、古代以降に帰属する混入遺物であることも懸念されたが、出土遺物中に古代以降の出土遺物は確認されなかったので、ひとまずは古墳に伴う遺物として理解しておく。

藤原古墳群の鉄鐸と鉄塊

藤原古墳群は田原市中山町藤原に所在し、渥美半島先端、三河湾に面した砂丘上に立地する（図２）。なお、付近には八幡上遺跡などの製塩遺跡が分布し、藤原１・２号墳においても製塩土器（渥美式Ｃ類）が出土している。なお、藤原古墳群は、１号墳の墳丘と石室の規模、１・２号墳に副葬された装飾付大刀等から、渥美半島でも優位な位置にあることが推断される。鉄鐸は１号墳、鉄塊は２号墳より出土した。

１号墳は、径 27 m、高さ 1.2 mの群中最大の円墳である。埋葬施設である横穴式石室（図７―左）は、南方向に開口する全長 10.24 mの擬似両袖型石室であるが、玄室幅に比して羨道幅がやや狭い点は、両袖型石室の要素でもある。玄室はわずかに胴張りを呈し、長さ 4.80 m、最大幅 2.03 mを計測する。床面には棺台とみられる敷石がある。羨道は床面が開口部に向かって約１m上り傾斜となる構造で、長さ 4.92 m、最大幅 1.36 mを計測し、両側壁は直線的である。なお、石室の石材は、三河湾の島嶼部あるいは、最奥部に産出する石材であることが指摘されている。

石室の床面からは、須恵器、耳環、鉄鏃、刀子、金銅製鴟目金具等が出土した。「石突」として報告された鉄鐸は、棺台と奥壁との空間に他の遺物とまとまった状態で出土した。これらの出土遺物はおよそ TK43 型式期に相当する。

鉄鐸は、身部長約 3.6cm、開口部径約 1.6cm の円錐形で、高蔵寺５号墳の鉄鐸と同様に、鉄板の両端を閉じ合わせて製作されているようである。報告書に詳細が記載されていないので、

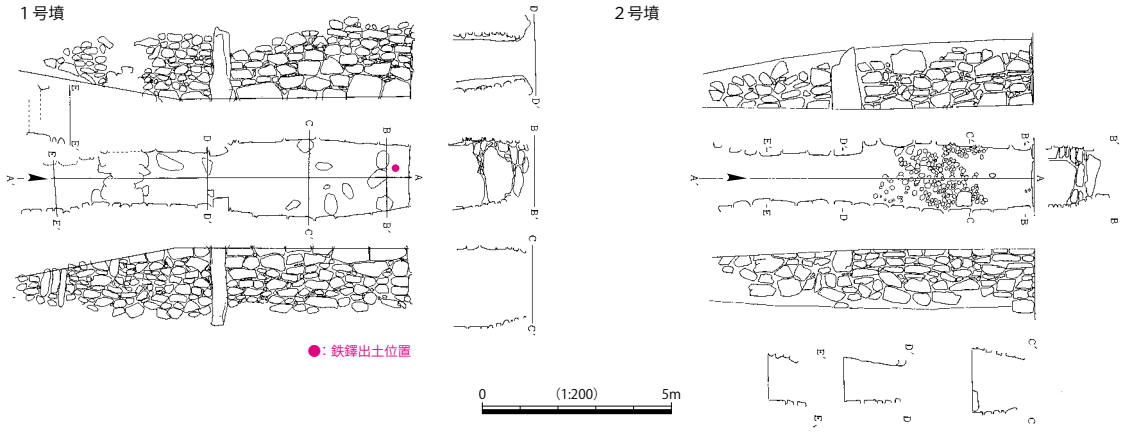


図７　藤原１・２号墳横穴式石室

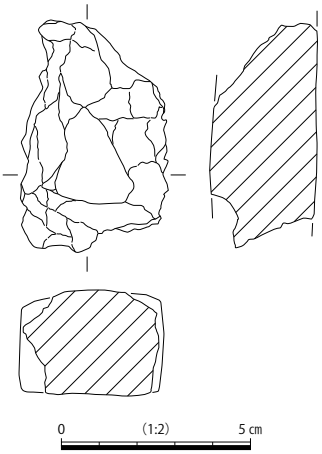


図８　藤原２号墳出土鉄塊

頂部の構造などについては明らかでないが、舌は遺存していないようである。

２号墳は、長軸 12 m、短軸 10 mの楕円形を呈する円墳である。埋葬施設である横穴式石室（図７―右）は、南方向に開口する全長 6.3 mの右片袖となる石室であるが、左右の玄門に立柱石を配する構造は、擬似両袖型石室に通じる要素である。玄室はほぼ長方形で、長さ 3.6 m、幅 1.3 mを計測する。羨道は長さ 2.7 m、最大幅 1.2 mを計測し、開口部に向かってやや開く。石室からは、須恵器、耳環、金銅装圭頭大刀、大刀、鉄鏃、弓飾り金具等が出土した。床面は撹乱されていたので、遺物の正確な出土位置は明らかでない。出土遺物はおよそ TK209 型式期に相当する。

鉄塊（図８）は、平滑な面が２面残存し、方柱状を呈していたと推測される。残存長 6.2cm、残存幅 3.9cm、厚さ 2.8cm を計測する。個体の残存状況からは、素材か製品かの識別は困難であるが、１号墳の鉄鐸との相関性をも考慮すれば（後述）、前者として理解してもそれほど不自然ではないように思われる。

鉄鐸について

基礎的把握

鉄鐸については、行田裕美が朝鮮半島を含めた古墳時代以降の資料を集成し、形態と機能、出土傾向、消長と分布について基礎的な考察を行っている（行田 1997）。小文においても行田の集成を基礎として、改めて古墳時代の鉄鐸を検索したが、従来、鉄鐸に対する認識が乏しかったこともあって、資料を完全に網羅することは難しく、詳細が公表されていない事例も少なくない。今後も資料の確認に努め、基礎資料を充実化することが望まれる。

現在までに管見に及んだ鉄鐸の出土例を図９・10、表１に示した。それによると、古墳から出土した例が圧倒的に多く、その他、集落・祭祀遺跡からの出土例も若干が知られている。出土する古墳は中小の古墳、地下式横穴墓がほとんどで、埋葬施設から出土する以外に、古墳の周溝から出土する事例も少なくない。

出現する時期は TK216 型式期前後で、以後、古墳時代を通じて消長する。確実な最古の例が岡山県西吉田北１号墳例である点は、現状においても大きな変更を要さない。分布については、九州地方に多く、瀬戸内地方、東海・近畿地方にかけて点在し、中部高地・北関東地方にまで及ぶ。

鐸身の形状は基本的に円錐形で、笠形に近いものと細身のものの両者がある。断面形については、正円に近いものと、不整な三角形状となるものがある。大きさは身部長６cm 前後、開口部径２～３cm のものが多く、身部長が10cm 以上となるものはほとんどない。ただ、鐸身の形状や大きさについては、行田も指摘するように、素材として裁断した鉄板の形状や大きさによって決定されるので、形状や大きさから型式学的に有意な属性を抽出することは難しい。閉じ合わせの方法についても、捻るように丸めて閉じ合わせるもの（合わせ目が斜方向）、鉄板の両端を合わせるように閉じ合わせるもの（合わせ目が縦方向）の両者があるが、これについても鉄板の形状に影響される性質の差異である。ただ、複数個体が同時に出土する場合、個体間で形状や大きさ、製作方法が相互に近似することが多い。このことは、埋葬や儀礼に際して、複数が一連の製品として製作されたことを示唆する。

鐸身内部の舌については、X線を通じた観察に頼る部分が大きい。幾つかの舌の遺存例からすると、棒状体の先端を叩き伸ばし、それを折り曲げて、懸通孔から通した針金状のものを懸ける装置とするものが多いようである。

研究の現状

従来から、古墳から出土する鉄鐸については、福岡県カクチガ浦３号墳の周溝において鉄鉗、同６号墳の周溝において陶質土器が共伴すること、西吉田北１号墳の箱式石棺において鉄鉗が伴出し、周溝からは鍛が出土することから、鉄鐸の所持、副葬の背景については、渡来系鍛冶工人との関係が類推されることも多い（亀田2000、村上2004 a・2007 など）。特に、村上恭通は、鉄鐸を渡来系の遺物として評価し、「鍛冶具に共伴する渡来系遺物は近畿地域では雛型鉄器、中国・九州地域では鉄鐸、馬形帯鉤、鋳造梯形斧であり、明らかに種類が異なっている」として、（鍛冶具副葬古墳における）鍛冶具と雛型鉄器（小型鉄製農工具）、鉄鐸の相関性に地域性があることを示唆している（村上2007）。

一方、朝鮮半島出土の鉄鐸については、朴淳發が、鉄鐸所持者の多様な性格について触れ、鍛冶具を共伴する陜川苧浦Ｅ地区５- １号墳の被葬者を鍛冶工人集団と推定しつつ、銀製鋲帯金具などが共伴する新院里２号墳の被葬者については、副葬品の質の高さや古墳の規模から、村落社会の豪民層または土豪層と推定した（朴淳發 1991）。村上恭通も、鍛冶具と鉄鐸が共伴する事例から、「陜川、昌原という加耶地域に限られた現象」としつつ、鉄鐸を鍛冶の技術者の出自や系譜を考えるうえで重要な遺物と認識している（村上 2004 b）。洪潽植は、鉄鐸を宗教的な道具として、小型墳における鉄鐸の副葬を、儀礼遂行者の社会的地位の低下と関連させて理解した（洪潽植 1995）。金東淑は、嶺南地方の古墳出土の６～７世紀代の鉄鐸を集成し、型式、年代、分布、出土状況等を詳細に考察した（金東淑 2000）。それによると、鋳造製を含む各型式が６世紀前葉までには出現し、以後、盛んに副葬されるようになるという。また、その型式の多様さからは、各地における自主生産が想定され、鉄鐸所持者の性格については、専業的な巫俗としての性格が重視されている *。

以上、研究の流れを通覧すると、鉄鐸が祭祀具であるとする認識はほぼ共通しているとみてよい。また、朝鮮半島との関係、鉄器製作者集団との関係が想定される事例も多いが、必ずしも全ての事例が適合するのではなく、その関係性については、朝鮮半島を含めて地域的な傾向を考慮する必要があることが理解される。

* なお、洪潽植や金東淑が整理したように、朝鮮半島の鉄鐸は６世紀以降に増加し、多様な型式が分布する。それに対して、古墳時代の鉄鐸は、基本的に鍛造製の円錐形（洪潽植Ⅱ式・金東淑Ａａ型）で、５世紀後半の事例が少なからず散見される。つまり、５世紀後半における鉄鐸の系譜や性格については、議論が十分でなく、現段階において確証的な帰結を導くことは困難である。

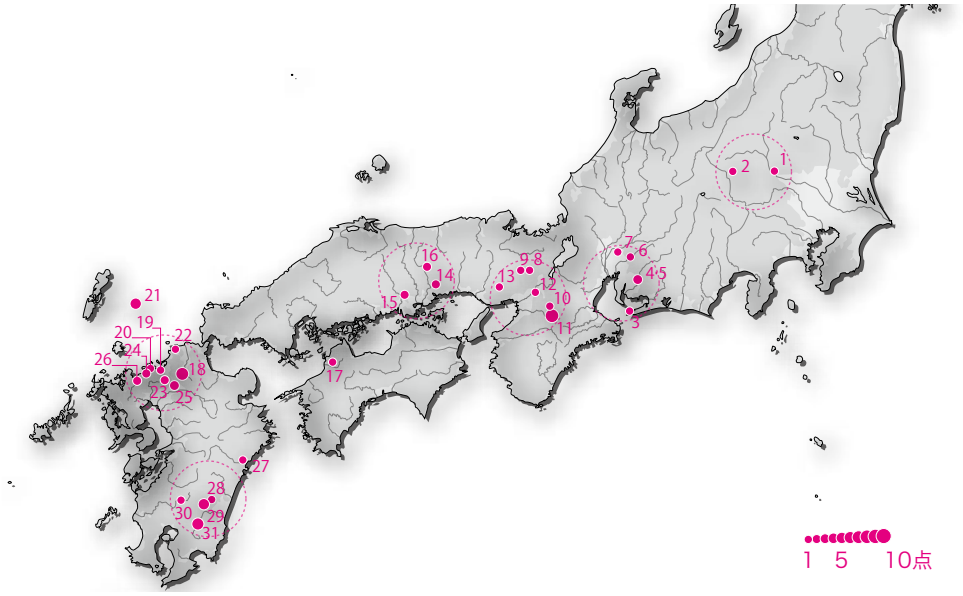


図９　古墳時代の鉄鐸の分布

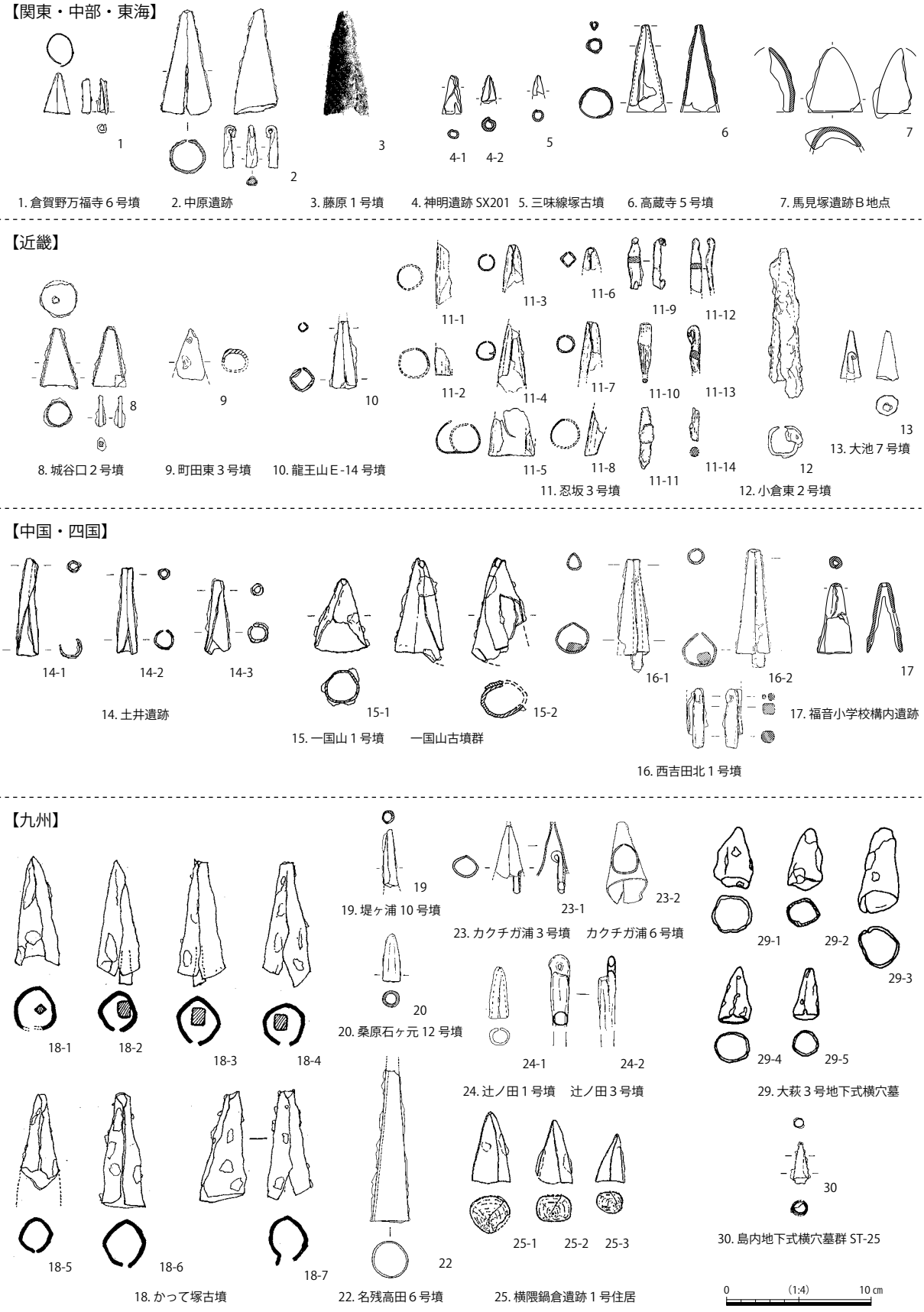


図 10　古墳時代の鉄鐸の諸例

表１　鉄鐸出土地名表（古墳時代）

		所在地	出土遺構	点数	舌	時期	共伴遺物
1	倉賀野万福寺６号墳	群馬県高崎市	竪穴式小石棺	1	○	５世紀後半～６世紀前半	小型刀子 臼玉
2	中原遺跡	長野県小諸市	竪穴住居	1	○	７世紀後半	土師器
3	藤原１号墳	愛知県田原市	横穴式石室	1		６世紀後葉	金銅製鴉目金具、鉄鏃、刀子 耳環、須恵器
4	神明遺跡	愛知県豊田市	祭祀遺構	2	×	５世紀後葉	鉄鏃、鉄鋌、鉄滓 石製模造品有孔円板、臼玉、ガラス玉、土師器・須恵器、炭化桃核
5	三味線塚古墳	愛知県豊田市	周溝	1	×	５世紀中葉	鉄鏃、U字形鍬鋤先（周溝）鉄鏃（粘土槨） 石製模造品有孔円板・勾玉、臼玉、土師器・須恵器（周溝）炭化桃核（粘土槨）
6	高蔵寺５号墳	愛知県春日井市	横穴式石室	1	×	６世紀末	大刀、鉄鏃、刀子 鞍金具、耳環、砥石、須恵器
7	馬見塚遺跡	愛知県一宮市	祭祀遺構	1	×	５世紀中葉	鉄剣、大刀、鉄鏃、刀子、鎌、鉄鋌、鉄滓 石製模造品有孔円板 ・勾玉・ 剣、管玉、臼玉、土鈴？、鏡形土製品？、土師器・須恵器、炭化米
8	城谷口２号墳	京都府南丹市	横穴式石室	1	○	６世紀中葉	大刀、蛇行剣、鉄鏃、鏃状鉄製品、刀子 ガラス玉、須恵器
9	町田東３号墳	京都府南丹市	木棺	1	×	５世紀後半	鉄剣、鉄槍、鉄鉾、鉄鏃、小型鉄斧、小型鉄鎌、小型鉄鑿
10	龍王山E-14号墳	奈良県天理市	横穴式石室	1	×	６世紀末	鉄鏃、刀子、鉄釘、不明鉄製品 土師器・須恵器
11	忍坂３号墳	奈良県桜井市	横穴式石室	8	○	６世紀末	鉄鏃、刀子、鉄釘 耳環、土師器・須恵器
12	小倉東２号墳	大阪府枚方市	木棺	1	×	６世紀後半	耳環
13	大池７号墳	兵庫県三木市	第４主体部	1	○	６世紀中葉	刀子 須恵器
14	土井遺跡	岡山県赤磐市	土坑墓	3	×	６世紀後半	耳環
15	一国山１号墳	岡山県岡山市	周溝	1	×	５世紀中葉	大刀（箱式石棺１）鉄鏃、U字形鍬鋤先、胡籙金具（箱式石棺２） 勾玉、管玉、ガラス玉（箱式石棺１） 紡錘車、土師器・須恵器（周溝）
	一国山古墳群	岡山県岡山市	流土中	1	×	５世紀後半？	
16	西吉田北１号墳	岡山県津山市	箱式石棺	2	○	５世紀中葉	鉄鉗（箱式石棺）、刀子、鑿（周溝） 土師器・須恵器（周溝）
17	福音小学校構内遺跡	愛媛県松山市	遺構外	1	×	５世紀後半？	鉄鏃、方形鍬鋤先、鎌、手鎌、鑿、鋳造鉄斧、鉄鋌（遺跡内） 石製模造品有孔円板・勾玉・子持勾玉、臼玉、管玉、土師器・須恵器（遺跡内）
18	かって塚古墳	福岡県嘉麻市	横穴式石室	7	○	５世紀後半	大刀、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃、横矧板鋲留短甲、鉄斧、刀子 方格Ｔ字鏡、ガラス玉
19	堤ケ浦10号墳	福岡県福岡市博多区	横穴式石室	1	×	６世紀末	大刀、鉄鏃、鉄斧、刀子、楔、鉄釘、不明鉄器、鉄滓 耳環、紡錘車、土師器・須恵器
20	桑原石ヶ元12号墳	福岡県福岡市西区	横穴式石室	1	×	６世紀後葉	大刀、鉄鏃、弓金具、鉄斧、刀子、鉄床、鉄鉗、鉄鎚、鋸、鑿、鉇 素環鏡板付轡、鋲具、有脚半球形雲珠・辻金具、馬鈴、耳環、ガラス玉、土師器・須恵器
21	沖ノ島１号祭祀遺跡	福岡県宗像市	祭祀遺構			古墳時代～	
22	名残高田６号墳	福岡県宗像市	横穴式石室	1	×	６世紀後葉	鉄鏃、留金具 金銅製空玉、土製玉
23	カクチガ浦３号墳	福岡県筑紫郡那珂川町	周溝	1	○	５世紀後葉	小刀、刀子、鉄鉗（周溝内） 鉄鏃（石室内） 轡、鋲具、帯金具、須恵器（周溝内）帯金具、土師器・須恵器（石室内）
	カクチガ浦６号墳	福岡県筑紫郡那珂川町	周溝	1	×	５世紀後葉	鉄鏃、鑿、不明鉄製品（周溝内）鉄鏃、弓金具、小刀、刀子（石室内） 土師器・須恵器（周溝内） 臼玉、ガラス玉、須恵器、陶質土器（石室内）
24	辻ノ田１号墳	福岡県前原市	横穴式石室	1	×	６世紀前半	
	辻ノ田３号墳	福岡県前原市	横穴式石室	1	×	７世紀	
25	横隈鍋倉遺跡	福岡県小郡市	竪穴住居	3	×		鉄鏃、刀子
26	中原５号墳	佐賀県唐津市	周溝	2	×	５世紀	刀子、鎌、手鎌、鉇 石製模造品有孔円板、臼玉、琥珀玉、ガラス玉
27	南方32号墳	宮崎県延岡市		1			
28	六野原10号地下式横穴墓	宮崎県東諸県郡国富町	地下式横穴	1	×	５世紀後半	大刀、鉄剣、鉄鏃、U字形鍬鋤先、小札横矧板眉庇付冑、横矧板鋲留短甲 X字環状鏡板付轡、獣形鏡、管玉、土師器
29	大萩３号地下式横穴墓	宮崎県西諸県郡野尻町	地下式横穴	5	×	５世紀後半～６世紀前半	鹿角装鉄剣、鉄鏃、鉄斧、刀子、U字形鍬鋤先 骨鏃
30	島内地下式横穴墓群ST-25	宮崎県えびの市	地下式横穴	1	×	５世紀後半	鉄鏃
31	菓子野３号地下式横穴墓	宮崎県都城市	地下式横穴	6	×	５世紀～６世紀	蛇行剣

高蔵寺５号墳、藤原１号墳の鉄鐸の位置

さて、高蔵寺５号墳の鉄鐸については、砥石（提砥）*が同時に副葬されることに加えて、近隣の廻間７号墳には鞴羽口が副葬されていることから、その副葬の背景には、鉄器製作と一定の関係があったことも推測される。藤原１号墳の鉄鐸についても、藤原２号墳の鉄塊から、鉄器製作との関係が推測される。これに関連して、渥美半島先端からも近い日間賀島の南知多町北地 14 号墳に、鉄滓（図 11）と製塩土器が副葬されていることも想起される。なお、藤原古墳群と北地古墳群は、三重県岸岡窯産の脚付短頸壷の副葬（中野 1993、藤原 1995）、あるいは石室石材の供給関係などから、相互に緊密な関係にあったことは疑いない。また、鉄製の祭祀具という点においては、田原市栄厳古墳群から出土した鉄製馬形（図 12）も注目される。

その他、東海地域の事例についても触れておく。豊田市神明遺跡 SX201、同三味線塚古墳周溝においては、小型の鉄鐸と考えられる円錐形の鉄製品が計３点出土している。いずれも小型で、頂部が貫通しないことから、非実用品と考えられる。これらは、鉄鋌、小型鉄製農工具、鍛冶滓と相関する可能性がある。また、一宮市馬見塚遺跡Ｂ地点の祭祀遺構においても、鉄鐸と鉄鋌に擬される鉄製品の出土がある（これらの詳細については、別稿を用意している）。

以上、高蔵寺５号墳、藤原１号墳に鉄鐸が副葬された背景として、砥石（提砥）、鞴羽口、鉄塊、鉄滓、鉄製馬形といった特徴的な遺物を例示しながら、鉄器製作と一定の関係が看取されることを述べた。この関係性を理解する際に参考となるのが、美作地域の西吉田北１号墳の周辺地域である。

TK216 型式期の西吉田北１号墳は、鉄鐸に加えて、鉄鉗、鑿等（図 13―１～５）を副葬、供献することは先に述べた。その至近には、鍛冶具、鉄塊、鉄滓など（同６～ 10）を副葬する長畝山・長畝山北古墳群が TK23 ～ MT15 型式期を通じて築造されている。さらに、西吉田北１号墳、長畝山・長畝山北古墳群と同一の山塊にある河辺上原古墳群は、TK47 ～ MT85 型式期を通じて築造された古墳群で、群中の古墳は、鋳造鉄斧、鉄塊、鉄滓など（同 11 ～ 15）を副葬する。なお、長畝山・長畝山北古墳群、河辺上原古墳群では、埋葬施設内への土器の供献が普遍化していること、長畝山北８号墳第１主体、長畝山北９号墳第３主体には算盤玉形紡錘車が副葬されていることなど、渡来系の色彩が顕著に反映されていることも特徴的である。つまり、この地域では、５～６世紀を通じて、鉄器製作を職掌とする集団が定着し、その集団内において鍛冶具や鉄素材、鉄滓を副葬、供献する儀礼が継続して実施されていたことが理解される。

このとき、これらの事例が、高蔵寺５号墳、藤原１号墳とその周辺地域における情況に対して一定の示唆を与えるものと評価することも可

* 提砥（佩砥）については、日本と朝鮮半島の出土例を比較検討した入江文敏による考察が参考となる（入江 1998）。

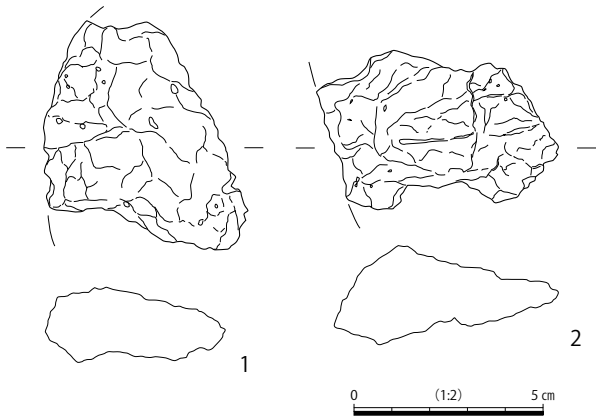


図 11　北地 14 号墳出土鉄滓

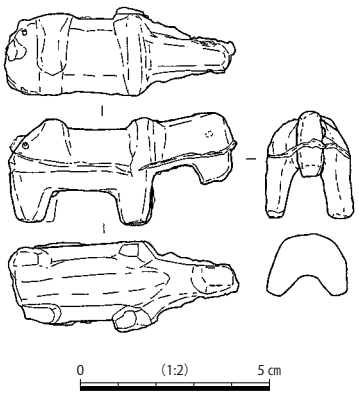
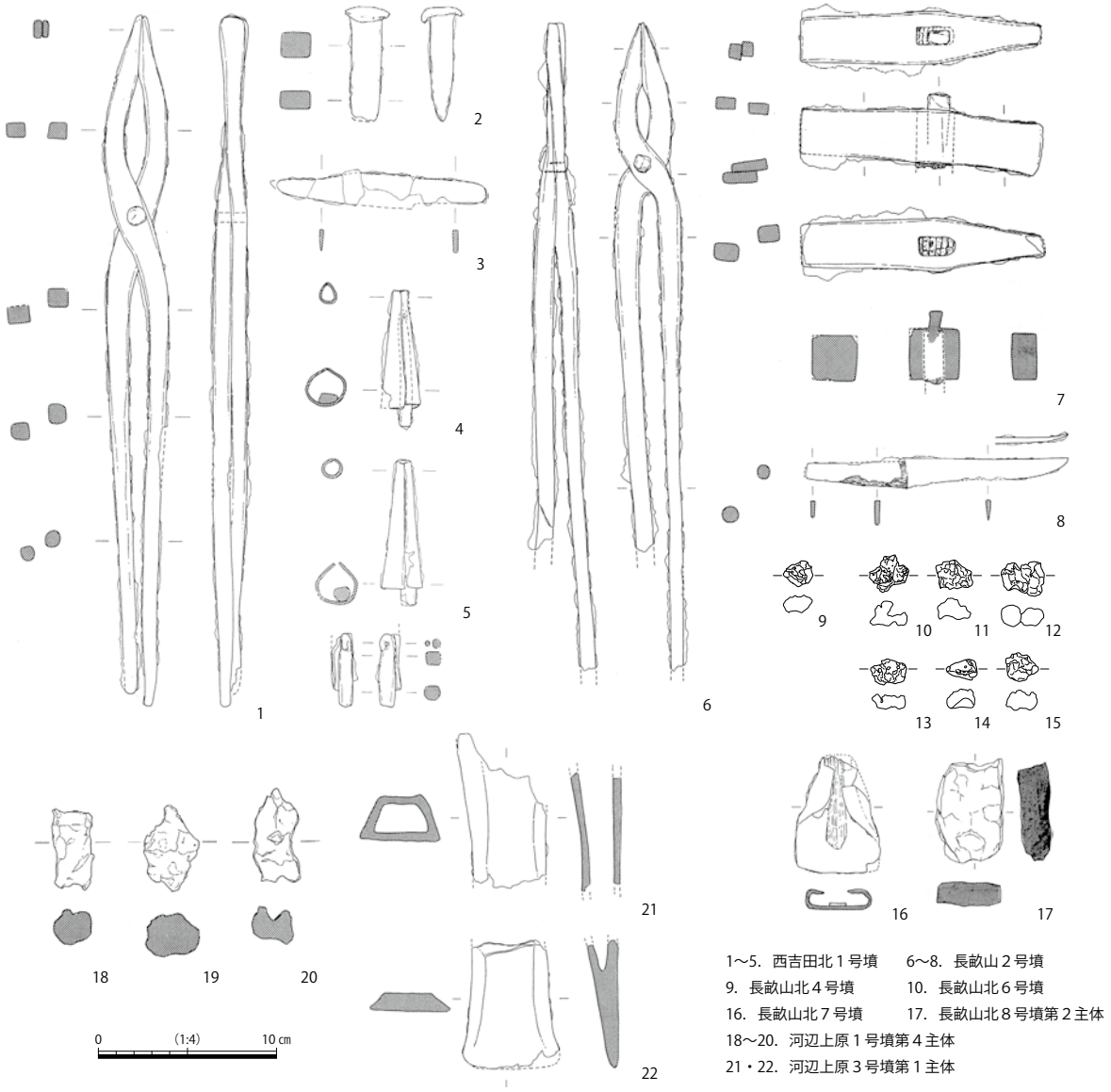


図 12　栄厳古墳群出土鉄製馬形

		墳形・規模	埋葬施設	鍛冶具、鉄塊、鉄滓等	他の副葬品など	時期
西吉田北１号墳		方・11×9.5m	箱式石棺	鉄鐸、鉄鉗、鑿	（鑿、刀子は周溝から出土）	TK216
長畝山２号墳		円・17m	礫床	鉄鉗、鉄鎚、鑿、鍛冶滓	鉄鏃、鉄斧、刀子、鎌、馬具、玉類、紡錘車、土師器・須恵器	TK23～TK47
長畝山北４号墳		円・12.3×11m	木棺	鍛冶滓	刀子、耳環、玉類、須恵器	TK47
長畝山北５号墳	第１主体	円・14.5m	竪穴式石室	鍛冶滓	鉄剣、鉄鏃、胡簶、刀子、鎌、鑿、鉇、馬具、耳環、玉類、土師器・須恵器	TK23
長畝山北６号墳		円・11m	木棺	鍛冶滓	鎌、鉄斧、鑿、須恵器	TK23
長畝山北７号墳		円・9.5m	木棺	小型鉄斧	大刀、鉄鏃、鉄斧、刀子、鎌、土師器・須恵器	TK23
長畝山北８号墳	第２主体	円・17m	竪穴式石室	鉄塊	鍬鋤先、耳環	TK47
長畝山北９号墳	第１主体	円・14.5×14m	木棺	鍛冶滓	大刀、鉄鏃、刀子、鑿、須恵器	TK23
	第２主体		木棺	鍛冶滓	鉄鏃、刀子、土師器・須恵器	TK47
河辺上原１号墳	第３主体	円・16.5m	木棺	鍛冶滓	鉄鏃、耳環、玉類、土師器・須恵器	TK10
	第４主体		礫床	鉄塊	大刀、刀子、鎌、鉇、土師器・須恵器、埴輪	TK10
河辺上原３号墳	第１主体	円・20m	木棺	鋳造鉄斧、鍛冶滓	鉄鏃、鉄斧、鑿、土師器・須恵器	MT15



1～5．西吉田北１号墳　6～8．長畝山２号墳
9．長畝山北４号墳　10．長畝山北６号墳
16．長畝山北７号墳　17．長畝山北８号墳第２主体
18～20．河辺上原１号墳第４主体
21・22．河辺上原３号墳第１主体

図 13　西吉田北１号墳、長畝山・長畝山北古墳群、河辺上原古墳群の鍛冶具、鉄塊、鉄滓等

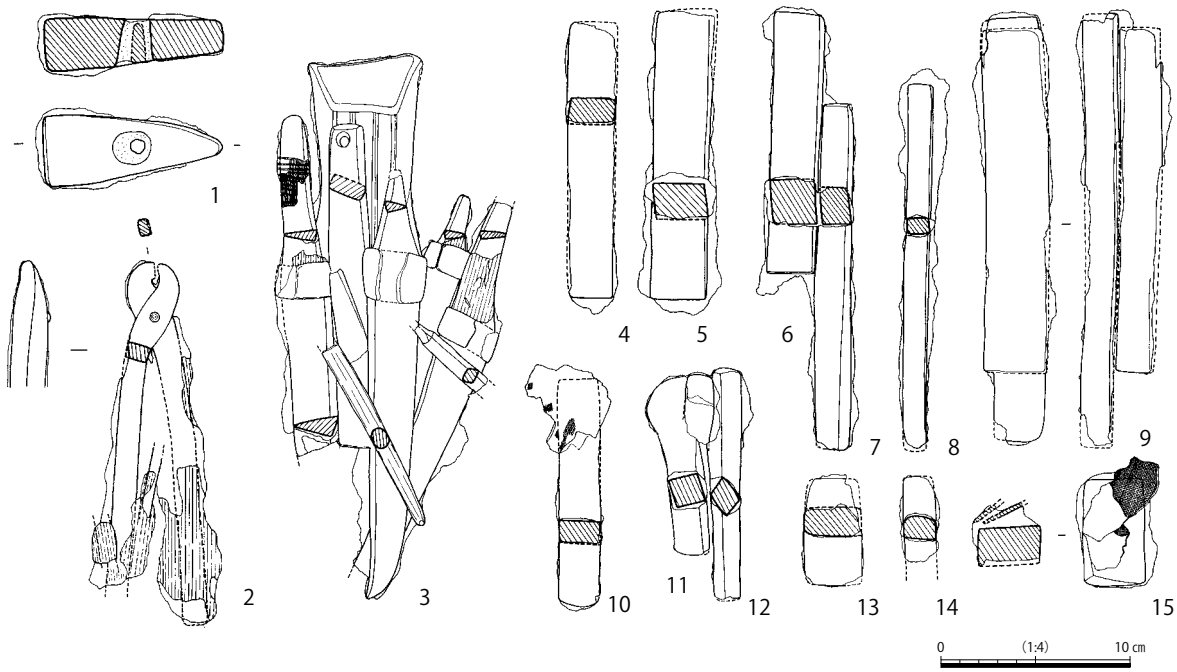


図 14　玉田 M ３号墳の鍛冶具、鉄塊等

能であろう。特に、藤原１・２号墳の被葬者は、古墳の規模、副葬品の内容をも考慮するなら、海産物生産に従事する集団を統領しつつ、その配下には生産用具、武器等を製作する集団をも帰属させていたことも推測されることになる。また、高蔵寺５号墳、藤原古墳群の周辺地域は、交通路の整備に伴って、鉄器製作に対する重要性がより強調されるようになったことも想像に難くない。また、最後に付言するなら、藤原２号墳の鉄塊は方柱状で、長畝山北８号墳第２主体、河辺上原１号墳第４主体の鉄塊がやや不整形である点とはやや異なり、例えば陝川玉田M３号墳の方柱状を呈する鉄塊（図 14―４～ 15）にむしろ近い。村上恭通は、鉄鋌や鋳造鉄斧（鋳造梯形斧）を鉄素材とする所論に再考を促しつつ、それらに代わる鉄素材として、これらの棒状「鉄塊」を、積極的に評価している。なお、玉田M３号墳は鉄鉗、鉄鎚といった鍛冶具、提砥など（同１～３）をも副葬する。

おわりに

高蔵寺５号墳、藤原１号墳に副葬された鉄鐸を起点として、古墳時代の鉄鐸の出土傾向を把握し、その地域的・歴史的展開の一側面について考察した。結果、祭祀具としての鉄鐸の所持、副葬の背景の一つには、鉄器製作者集団の儀礼行為があったことを推察した。ただし、その背景については、朝鮮半島を含めて、地域的・時代的な傾向が介在していることも明確に意識し、地域社会総体において評価する必要がある。その一方で、鉄鐸は、朝鮮半島と日本列島を通じて出土する儀礼的な器物であるだけに、その地域的・歴史的展開は、両地域において儀礼、思想が共有、習合され、複雑化する事情を胚胎している可能性がある。その可能性に期待するところは大きい。

なお、今回提示した資料については、冶金学的な分析をほとんど介在させていない。今後、各資料に対する分析がぜひとも望まれるところである。

本文作成の過程で、下記の諸機関・諸氏よりご高配を賜った。記してお礼申し上げる。
愛知製鋼株式会社 鍛造技術の館
一宮市博物館　岡山県古代吉備文化財センター
春日井市教育委員会　田原市教育委員会
津山市教育委員会　豊田市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
浅田博造　入江文敏　梅木謙一　大橋雅也
小郷利幸　小島敏男　齋藤瑞穂　土本典生
弘田和司　松本　茂　増山禎之　森　泰通

鉄鐸出土遺跡・古墳文献一覧（番号は表１、図９・10 に一致）

1. 倉賀野万福寺６号墳：大和久震平他 1983『倉賀野万福寺遺跡』山武考古学研究所
2. 中原遺跡：上沼由彦他 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告 18―佐久市内その４・小諸市内その２―　芝宮遺跡群・中原遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告 39　長野県埋蔵文化財センター
3. 藤原１号墳（古墳群）：久永春男他 1988『藤原古墳群』渥美町埋蔵文化財調査報告書５　渥美町教育委員会／岩原剛 2005「藤原古墳群」『愛知県史　資料編３　考古３　古墳』愛知県
4. 神明遺跡：森泰通他 2001『神明遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集　豊田市教育委員会
5. 三味線塚古墳：三田敦司他 2001『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集　豊田市教育委員会
6. 高蔵寺５号墳：大下武他 1974「高蔵寺５号墳」『春日井市遺跡発掘調査報告』第６集　春日井市教育委員会
7. 馬見塚遺跡Ｂ地点：岩野見司 1974「馬見塚遺跡Ｂ地点―祭祀遺跡―」『新編　一宮市史　資料編四』一宮市
8. 城谷口２号墳：中川和哉・高野陽子・田中奈津子 2007「城谷口古墳群発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第 125 冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター／中川和哉 2007「城谷口２号墳出土の特殊な鉄製品類について」『京都府埋蔵文化財情報』第 103 号　財団法人京都府文化財調査研究センター
9. 町田東３号墳：森下衛・辻健二 1991『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町文化財調査報告書第８集　園部町教育委員会
10. 忍坂３号墳：前園実知雄他 1978『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 34 冊　奈良県立橿原考古学研究所
11. 龍王山Ｅ―14 号墳：河上邦彦他 1993『龍王山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 68 冊　奈良県立橿原考古学研究所
12. 小倉東２号墳：西田敏秀「小倉東遺跡（第５次調査）」『枚方市文化財年報』12　財団法人枚方市文化財調査研究会
13. 大池７号墳：高瀬一嘉 1995『大池７号墳』兵庫県文化財調査報告第 137 冊　兵庫県教育委員会
14. 土井遺跡：重根弘和他 2007『土井遺跡　谷の前遺跡　慶運寺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告 191　岡山県教育委員会
15. 一国山１号墳（古墳群）：神谷正義・河田健司・西田和浩 2006『南坂８号墳　一国山城跡　一国山古墳群』岡山市教育委員会
16. 西吉田北１号墳：行田裕美・坂本心平・平岡正宏 1997『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 58 集　津山市教育委員会
17. 福音小学校構内遺跡：高尾和長他 2003『船ヶ谷遺跡第４次調査Ⅱ　福音小学校構内遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書 95　松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
18. かって塚古墳：児島隆人 1967「福岡県かって塚古墳調査報告」『考古学雑誌』第 52 巻第３号　日本考古学会
19. 堤ヶ浦 10 号墳：吉留秀敏 1987『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 151 集　福岡市教育委員会
20. 松浦一之介他 2003『元岡・桑原遺跡群２―桑原石ヶ元古墳群調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 744 集　福岡市教育委員会
21. 沖ノ島１号祭祀遺跡：宗像大社祭祀遺跡調査隊編『沖ノ島Ⅱ』宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和 45 年度調査概報　宗像大社復興期成会
22. 名残高田６号墳：原俊一 1990『名残Ⅱ』宗像市文化財調査報告第 24 集
23. カクチガ浦３・６号墳：宮原千佳子他 1990『カクチガ浦遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第 23 集　那珂川町教育委員会
24. 辻ノ田１・３号墳：前原市教育委員会 1994『井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群』
25. 横隈鍋倉遺跡：速水信也他 1985『横隈鍋倉遺跡』小郡市文化財調査報告第 26 集　小郡市教育委員会
26. 中原５号墳：小松譲 2002『西九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　中原遺跡』佐賀県教育委員会
27. 南方 32 号墳：山田聡 1993「南方古墳群」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県
28. 六野原 10 号地下式横穴墓：瀬之口傳九郎他 1944「六野原古墳調査報告」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第 13 輯　宮崎県／長津宗重 1993「六野原古墳群・地下式横穴墓群」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県
29. 大萩３号地下式横穴墓：北郷泰道 1984「大萩地下式横穴墓群」『宮崎県文化財調査報告書第 27 集』宮崎県教育委員会／岩永哲夫・茂山護・北郷泰道 1993「大萩地下式横穴群」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県／東憲章他 2004『それでも騎馬民族はやってきた』宮崎県立西都考古博物館
30. 島内地下式横穴墓群 ST-25：中野和浩 2001『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第 29 集　えびの市教育委員会
31. 菓子野３号地下式横穴墓：矢部喜多夫 1993「菓子野地下式横穴群」『宮崎県史　資料編　考古２』宮崎県／矢部喜多夫 2006「菓子野地下式横穴墓群」『都城市史　資料編　考古』都城市

本文参考文献

入江文敏 1998「佩砥考―日韓出土資料の検討―」『網干喜教先生古希記念考古学論集』網干喜教先生古希記念会
亀田修一 2000「鉄と渡来人－古墳時代の吉備を対象として－」『福岡大学総合研究所報』第 240 号（総合科学編第 3 号） 福岡大学総合研究所
行田裕美 1997「鉄鐸について」『西吉田北遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 58 集 津山市教育委員会
中野晴久 1993「脚付扁平広口坩考～須恵器における地域性の考察～」『知多古文化研究』 7 知多古文化研究会
藤原秀樹 1995「岸岡山 2 号窯出土の須恵器について」『海の考古学』鈴鹿市教育委員会
村上恭通 2004 a「古墳時代における鍛冶具副葬古墳と被葬者像―中期を中心として―」『考古論集―河瀬正利先生退官記念論文集―』河瀬正利先生退官記念事業会
村上恭通 2004 b「朝鮮半島系遺物を共伴する鍛冶具をめぐって」『東アジアにおける鉄鍛冶技術の伝播と展開』平成 12 ～ 15 年度科学研究費補助金基盤研究 (B)(2) 研究成果報告書（研究代表者 古瀬清秀）
村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
金東淑 2000「嶺南地方の 6 ～ 7 世紀代墳墓出土鉄鐸に関する研究」『慶北大学校考古人類学科 20 周年記念論叢』慶北大学校人文大学考古学科
朴淳發 1991『慶州新院里古墳群発掘調査報告書』慶北大学校博物館・慶南大学校博物館
洪潽植 1995「古墳文化を通してみた 6 ～ 7 世紀代の社会変化」『韓国古代史論叢』 7 韓国古代社会研究所 駕洛国史蹟開発研究院

その他の遺跡・古墳文献

猪ノ洞古墳：小栗鐵次郎 1930『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第八 愛知県
栄厳古墳群：小野田勝一 1967「渥美半島鎌田古墳出土の鉄馬について」『古代学研究』49 古代学研究会／岩原剛 2005「栄厳第 1 号墳」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県
北地 14 号墳：磯部幸男他 1979『日間賀島の古墳』南知多町文化財調査報告第三集 南知多町教育委員会 1979 ／早野浩二 2005「北地古墳群」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県
廻間 7 号墳：木田文夫・北川定務他 1981「廻間第 7 号墳」『春日井市遺跡発掘調査報告第 7 集』春日井市教育委員会
河辺上原古墳群：小郷利幸他 1994『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 54 集 河辺上原遺跡発掘調査委員会・津山市教育委員会
長畝山北古墳群：行田裕美・木村祐子 1992『長畝山北古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 45 集 津山市教育委員会
長畝山古墳群：今井堯 1972「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史 第 1 巻 原始・古代』津山市／坂本心平 1996「長畝山 2 号墳出土の資料について」『年報 津山弥生の里』第 3 号 津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター
玉田M 3 号墳：趙榮濟・朴升圭 1990『玉田古墳群Ⅱ M 3 号墳』慶尚大学校博物館調査報告第 6 輯 慶尚大学校博物館

付．鉄鐸、鉄製祭祀具の儀礼的背景

祭祀具としての鉄鐸と、鉄器製作との接点を記す記述が、『古語拾遺』、天石屋戸段の「令天目一筒神作雑刀・斧及鉄鐸（古語、佐那伎）」の記述である。また、『延喜式四時祭式』鎮魂祭条には「大刀一口 弓一張 箭二隻 鈴廿口 佐奈伎廿口（下略）」とあることから、鉄鐸（サナギ）は鎮魂に用いられた祭祀具とされている。

『梁塵秘抄』巻二、二六二番歌、「南宮の本山は 信濃国とぞ承る さぞ申す 美濃国には中の宮 伊賀国には稚き児の宮」の歌は、信濃国諏訪社、美濃国伸山金山彦神社（南宮大社）、伊賀国敢国神社が「南宮」と称せられたことを示すもので、八木意知男は、諏訪大社が、先の『古語拾遺』所伝の「天目一箇神」、あるいはその系統に連なる神、仲山金山彦神社（南宮大社）が金山彦神、敢国神社が金山毘売神（金屋子神か）を祀り、三社が三位一体の製鉄神を祀っていたことを背景とすることを洞察した（八木意知男 1977「南宮考―『梁塵秘抄』二六二番歌を中心として―」『古代文化』第 29 巻第 11 号 財団法人古代学協会）。

これに関連して、諏訪大社などに祭具として、「神代鉾（鉄鉾）」に付属する「鉄鐸」が伝世されていることについては、すでに大場磐雄や真弓常忠による考証がある（大場磐雄 1972「続鉄鐸考」『信濃』第 24 巻第 4 号 信濃史学会、真弓常忠 1981『日本古代祭祀と鉄』学生社）。また、敢国神社の近隣には、「鐸」に関係するとされる「佐那具」の地名が残る。南宮と称されることもあったという美作国一宮中山神社については、先の西吉田北 1 号墳、長畝山・長畝山北古墳群、河辺上原古墳群との関係が想起される。

さて、知多半島の大野鍛冶では、仕事始めの打ち初めに、「剣（の作り物）」などと称される剣形の雛形品を作り、「南宮金山彦大神神符」の札を供えた神棚の柱に打ち付ける風習が伝えられている。この風習は、まさに、先の『古語拾遺』における鍛冶を職掌とした神格と刀（剣）の関係を彷彿とさせるものである。

これらの資料は、鉄鐸などの鉄製祭祀具と鍛冶を職掌とする神格との関係が反映されている点において共通し、「天目一箇神」、「南宮」の信仰を通じて相互に連関する。すでに示したように、古墳時代の鉄鐸は、鉄器製作者集団と必ずしも相関するものではないが、鉄鐸などの鉄製祭祀具は、古墳時代以降も鉄器製作との関係が特に意識され、列島固有の地域的展開を遂げたとも推察される。また、鉄鐸が第一義的には祭祀具で、後世に鍛冶を題材とした儀礼行為が神話の世界にも統合されていることをより積極的に評価すれば、鉄鐸が使用される古墳時代中期以降、帰属集団や儀礼の習合が複雑に進行し、儀礼の背景、それを執行する集団は明確には分かちがたい存在になっていたとも憶測される。これらの詳細については、機会を改めて論じることとしたい。